

令和6年度学校自己評価システムシート(県立けやき特別支援学校伊奈分校)

目指す学校像	安定した人間関係を形成し、「自らの病状や実態を理解し、自らの健康管理ができる力」と「基礎学力」を身につけさせ、子どもたちの夢や希望の実現に向けて全力で取り組む、保護者・病院から信頼される学校。
--------	--

重点目標	1 病弱教育における教職員の専門性の向上と児童生徒一人一人に応じた教育活動の充実 2 病弱教育のセンター的機能の充実及び啓発と保護者や地域、関係諸機関に信頼される学校づくりの推進 3 児童生徒が生き生きと学べるよう、安心・安全な学習環境の整備
------	---

※ 重点目標は3つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目(年度達成目標を意味する。)は複数設定可。
 ※ 番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

※学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価懇話会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

出席者	学校関係者	7名
	生徒	1名
	事務局(教職員)	9名

学 校 自 己 評 価					
年 度 目 標			年 度 評 価 (2 月 1 日 現 在)		
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況
1	【現状】 病弱教育の専門性を生かして、つながる・よりそうをキーワードに自立活動や各教科の指導、そのほかの教育活動を展開している。各教科の特性を踏まえ、ICT機器の活用が広がっている。児童生徒の実態に応じて、タブレット端末を活用した自分メーターの実施により児童生徒の自己理解の深まりにつながっている。 【課題】 教育活動にICT機器を活用する方向や自尊感情の高まりにつながっている。一方で、情報リテラシーについての課題が見えてきた。教職員の研修を進めながら、児童生徒一人一人が、情報及び情報機器を適切に取り扱うことができる力を育成していく必要がある。	1 教員が児童生徒の実態適切に把握し、学習意欲の向上させるとともに学習空白を埋めながら、児童生徒が自尊感情を高めて前籍校に復学する。	1-① 児童生徒の実態に応じて自分メーターを活用し、児童生徒が自己理解を深められる取り組みを行う。 1-② 各教科等の指導においてICT機器を積極的に活用しわかりやすい授業を展開する。また、学びを深める過程において、児童生徒の自尊感情が高まるような取り組みを行う。	1-① 児童生徒の実態に応じた自分メーターの活用ができたか。 1-② ICT機器を活用して、児童生徒の自尊感情を高める取り組みを実施できたか。	1-① 年度初めに「自分メーター」の使い方について全体研修を行った。個々の実態に応じて必要な配慮等について理解を深めることができた。児童生徒に対しては、転入直後と転出直前に実施し、自己理解を高める手だてとして活用できた。また、復学支援会議等において情報共有のツールとして活用し、スムーズな復学に向けて児童生徒理解を深めることができた。 1-② 教科指導において、調べ学習としてのICT活用だけでなく、視覚情報の提示や意見発表の手立てとしてICT機器の活用が進んでいる。自分の考えを文章にまとめたり、みんなの前で発表したりすることに苦手意識のある児童生徒にとって、ICT機器を使って間接的なやり取りができることは、学びを深めた「できた」という意識を高めることに有効だった。
		2 情報リテラシー教育に取り組む、教職員・児童生徒とともに、適切なICT機器の活用を行う。	2-① 情報リテラシーを高める取り組みについて、教職員・児童生徒ともに学べる機会や内容の充実を図る。 2-② 児童生徒が情報リテラシー教育を踏まえたICT機器の活用を行いながら学習や行事に取り組む。	2-① 授業の中でICT機器を使っていく中で、適切な情報の得方や使い方のルールについて個別に指導を行った。近年、著作権侵害で学校や地方自治体等が訴えられるという事案が増加していることもあり、特に著作権にかかわる事項について、知識をアップデートするようにした。 2-② インターネットを活用するにあたり、一人一人面談を行い、SNSやネットショッピング等についてどのように関わりを持ってきたかということ把握するようにした。また、学校におけるインターネットやタブレット機器の使い方についてのルールを確認することで、適切な利用が進められた。授業で使っていく際にも、適宜ルール確認をしつつ、不適切な使い方にならないように配慮した。	
2	【現状】 在籍児童生徒の前籍校と連携を図りながら、必要に応じて関係諸機関を交えた復学支援会議を行うことで、退院後の学校生活を安定して送ることができる児童生徒が増えてきている。センター的機能を生かした地域への取組により、病弱教育の理解の促進につながっている。 【課題】 復学後の情報収集や地域支援のニーズに応えるため、よりスムーズな情報収集の手立てを講じるとともに、地域への情報発信力をさらに高める必要がある。	1 前籍校や関係諸機関との連携を深め、安定した登校につながる復学支援を行う。	1-① センター的機能を充実させるため、前籍校との日々の連携を深めるとともに、復学後のアンケートをWEB上で行い、適切なタイミングでの情報収集、情報共有、情報発信を行いながら、児童生徒の復学支援やアフターフォローを行う。	1-① センター的機能の充実を図り、児童生徒の復学支援やアフターフォローに取り組めたか。	1-① 児童生徒転入後に前籍校訪問を行い、児童生徒についての情報をいただくとともに、伊奈分校での学習の様子や復学に向けたロードマップ等についての情報提供を行っている。また、適宜担任間で連絡を取り合うことで、児童生徒と前籍校との関係が継続しスムーズな復学につながった。
		2 コミュニティ・スクールを策定し、地域に病弱教育の啓発・理解促進に向けた情報を提供する。	2-① 精神医療センターをはじめ様々な委員と連携を深めながら、児童生徒の学習環境を整えるとともに、地域へ病弱教育についての情報提供を行う。 2-② センターの機能についてのリーフレットをリニューアルし、県内すべての市町村教育委員会と関係各所へ配付し、病弱教育の啓発・理解促進を行う。	2-① コミュニティ・スクールを活用して、児童生徒の学習環境の整理や、地域に病弱教育についての情報発信ができたか。 2-② リーフレットのリニューアルを行い、k各教育委員会や関係各所への配付ができたか。	
3	【現状】 新型コロナウイルス感染症について、精神医療センターと連携して感染対策を講じながら、学習活動や行事を実施している。各学期1回の防災学習を実施することが定着し、参加する児童生徒の数も増えている。 【課題】 行事の実施時期と感染症の流行状況を踏まえ、精神医療センターと連携し、組織的な対応を行いながら各種行事に取り組む必要がある。児童生徒が災害時の対応についての深い学びを実現するために、災害対策や防災教育に焦点化した学習だけでなく、教科横断的な学習活動を展開する必要がある。	1 感染対策を講じつつ、安心・安全な学習環境を構築する。	1-① 精神医療センターとの定期的な会議を通して、感染状況の把握を行い、行事に向けた感染対策を講じる。	1-① 精神医療センターとの定期的な会議を通して、感染状況の把握や、把握した内容に基づいた感染対策を講じて、行事が実施できたか。	1-① 集会活動、校外行事、外部講師による体験学習など、児童生徒の体験を豊かにするための活動計画を立てた。感染症の状況について病院と情報共有を密にし、必要な感染対策を講じつつ充実した体験活動を実施することができた。また、養護教諭による「歯の健康」をテーマにした保健指導を行い、自分自身の健康管理について学ぶ機会を設けることができた。
		2 防災学習を定期的に行い、児童生徒の防災意識を高める取り組みを行う。	2-① 防災学習について、外部機関の見聞も活用しながら、災害対策に焦点化した特設授業を行う。また、年間を通して教科横断的な学習活動を展開する。	2-① 外部の専門機関等の見聞も取り入れながら、教科横断的な学習活動が展開できたか。	2-① 防災士の資格を持つ教員により、学期に1回ずつ防災に特化した特設授業を実施した。専門的な知識を身近な生活と結びつけて考えさせる内容に再構築するとともに、段ボールベッドや簡易トイレ等の非常用具の使用体験を行うことで、防災意識を高めることができた。また、理科や社会科の授業でも災害のメカニズムや地域の災害対策について丁寧に扱われ、教科横断的な学習を実施することができた。

学 校 関 係 者 評 価	
実 施 日 令 和 7 年 2 月 1 9 日	
学 校 関 係 者 からの 意 見 ・ 要 望 ・ 評 価 等	
達成度	A
次年度への課題と改善策	1-① 「自分メーター」を、児童生徒自身が自己理解を深め自己肯定感を高める具体的なツールとして活用できている。教員にとっても、児童生徒の理解を深めるツールとして活用できている。日本工業大学と連携したアプリ化プロジェクトが進んでおり、より使いやすいツールへとアップデートを重ねている。児童生徒の実態に応じた配慮など、教員自身がより使い方に精通するとともに、蓄積したデータを指導に生かす工夫等についての検討も必要になっている。 1-② ICT機器を発表のツールとして活用することは、対人コミュニケーションに課題のある児童生徒にとって学びを深める有効な手立てとなっている。過度に機器依存することがないように配慮しつつ、効果的な使い方の工夫や必要な配慮として前籍校や進路先への情報提供等について検討する必要がある。 2-① デジタル情報の増加に伴い、著作権にかかわるデリケートな事案が増加している。簡単に他者の著作物を入手することができることに加え、簡単に外部へ発信できるようになったことで、他者の権利に対しても敏感になる必要がある。権利侵害に該当するかどうかの判断はケースによって異なるため、やみくもに規制するのではなく、児童生徒が意識を高められるような指導の工夫が必要になる。 2-② 校内ではタブレット機器の使い方のルールを守れていても、家庭に戻った際に過剰な課金をしてしまったり長時間のネット依存に陥ってしまったりするケースが見られた。保護者からネットとのかかわり方についての要望も寄せられている。病棟に児童生徒用のネットワーク機器が設置されることもあり、病棟と連携した情報教育の必要性が高まっている。
学校関係者からの意見・要望・評価等	・ 病弱教育においてICT機器の活用は必要不可欠なものとなっている。オンライン授業を行うにあたっては、発信する学校の環境だけでなく受け手側の環境整備も重要になる。協力してもらえ関係作りを丁寧にされていることがよく分かった。 ・ 行事の場面で、ICTを使った発表などを目している。実際に発表するのが苦手であっても動画を作って発表したり、インターネットを使ってプログラムを作ったり、上手に使っていると思う。 ・ 学習支援ももちろん必要だが、入院している子どもたちにとっては、勉強する意欲や自己管理能力の育成も重要になる。「非認知能力」と言われる部分の支援も願いたい。 ・ ICTの活用と個人情報の管理(自己管理)をはじめとした情報リテラシー教育は、いわば車の両輪のような関係にある。病院でも、現代に合った適切なICT利用について工夫していかなければならないと考えている。 ・ オンラインに慣れてきている子どもたちにとって、実体験をどう取り入れていくかが課題。例えば畑で野菜を育てるといった体験は、病院でも取り入れている。
達成度	A
次年度への課題と改善策	1-① 復学後のアンケートを行うことで前籍校のニーズを把握し、より丁寧な連携につなげていく。また、引き続き復学後の学校支援にも丁寧に対応し、復学支援から定着支援へとつなげていく。 2-① 発達の特性和精神的な課題に起因して学校や地域コミュニティでの生活が困難になっている児童生徒の支援について、他機関と連携することで情報を集める必要がある。また、積極的に地域への情報発信を行い、地域の教育力を高めるための支援について力を入れていく必要がある。 2-② 地域からの支援要請のニーズが高まっている一方、精神的な課題を抱えている児童生徒の支援を行っている学校が、県内では伊奈分校のみであり、全てのニーズに応えることが困難な状況にある。学校間や各機関との連携により、地域の教育力を高めるような支援のコーディネートへと移行していく必要がある。
学校関係者からの意見・要望・評価等	・ 実際にはできる／できないの問題はさておき、YouTubeやInstagramなどを使っての発信はとても有効だと思う。 ・ ネット上の発信も有効だが、情報誌のような形での発信も一定程度の効果は見込める。また、教育実習に来た大学生等のロコミによる情報発信もきっかけになると思う。 ・ 伊奈分校のある精神医療センター第5病棟は、児童思春期病棟ということで、中学生年代が終わると病棟での治療も一区切りとなってしまふ。他の病院に転院したり、大人の病棟に入院したりということに穴。中学卒業後の学習支援については、病院の検討課題にもなっている。
達成度	A
次年度への課題と改善策	1-① 集会活動、校外行事、体験学習などは、児童生徒にとって人前で発表したり自分たちで運営に参画したりという貴重な経験となっている。病院と連携して感染症への配慮をしつつ、学習意欲や自己肯定感を高める大切な学習の機会として継続していく。
学校関係者からの意見・要望・評価等	・ 集会活動は、子どもたちが成長できるいい機会となっている。病院関係者も招いていただいているが、子どもたちの意欲や発表の工夫には感心させられている。感染症対策は引き続き行っていくが、調理室や会食といったプログラムを病棟でも行っている。上手に両立できるような工夫をしながら、活動を計画していきたい。